

である。殊にその中には粟だの稗だのが一ぱい難つて居る。どう思つても讀書が足りない。それからこの人達の言葉と文章とが別々な形なのだから、骨の折れる事であらう。と氣の毒でたまらない。文字でもこの觀るはこういふ時にかかふ、この見るはこんなに見るのだ等といふ面倒さをとつての昔通り越して文字はたゞ音をあらはす符徴にすぎない位のものであらう。あゝ早くどうにかしたい。しなけれはならない。しかし自分の力ではどうする事も出来ない。

□それから作文について思ひ出すことの二は文法である。一生徒が「先生文法なんてほんとに必要がない様な氣がしますよ。だつてあんなこと習はなくてももちやんと分つて居るのですもの。」と言つた。必要がない、必要がない。これだけの言葉が、明かに今の文法といふ學科の價値を語つて居ると思はれる。どうすればもつと國語と文法とを密接な關係あるものにできるであらうか。そしていつもよく伺つて居た様に——勿論その言葉の性質にもよるであらうが——ドイツでは小學校の上級になると文法上の誤

謬なんか一つもなくなるといふ様に、日本でもそうなればどんなにうれしい事であらう。多くの生徒は「もう〳〵文法ほゞいやなものほゞございませぬ」と言つた。ほんと言へば教へる者自身もそんなに文法を面白いものだとは思つて居なかつた。しかし今こゝで教へて見て、むづかしものだと知つて、はじめて一種の面白味を感じる事が出来た。これは苦しい文法といふものを二時間もたされて得た尊い賜物であつた。

詞を説明語だ等といふ生徒もあつた位にわかつては居ないのである。主語とか説明語とかいふ言葉は知らなくてもまさか書く時に間違へる事はないからこれは後でもいゝとして、とに角一番誤り易い動詞の活用や助動詞への連續やは小學校の上級の時からでもその場合々に當つて教へて行かれない事はないと思ふ。

とに角國語や文法について解決されねばならぬ大きな問題の横はつて居る事を教へて見てはじめて痛切に感じたのは私には誠に貴い大い寶賜であつたと思ふ。

私はさしよのひつじであります。我が圖書室は文科の私にもは柔い香りの高い草の生ふる廣野である。外國から來る月々の報告、論文、雜誌、我が國の新刊書の數々、南摩文庫武田文庫の各種、いづれも強い力を以て私どもを引つけます。

もう雪も消えました。春は甦りました。上には明るい空を春の光を帯びた雲がゆる／＼動いて居ります。下には青々した野が霞の中へつゞいて居ります。いで柔い草を踏んでゆるやかに野をあざりませうか。

國語の讀本と關聯して例などもなるだけ讀本の中から出せとは學科生の時分によく／＼伺つて來た事であつたが、一体どうすればこの國語の讀本とこの文法の教科書との連絡がつくのかどう／＼ちつともわからなかつた。どうしても文法は文法として特別な學科としておくより外道がないのであらうか。わからない事があつたらお聞きなさい」と言つてもだまつて居る。どうしたらよく文法を教へることが出来るだらうかと靜に考へても見た。例を出して發問すれば半分も手が上らない。尤も文章篇だから無理もないが動詞をつかまへて主語だと言つて見たり名

中に作  
等於文  
教ける科

ポストンの Girls' Latin School の Carolyn M. Gerrish 氏が校長會席上の講演の大意を申し上げます。ひつじには少し硬すぎます。

この講演は三の部分から成り立つて居る。即ち(一)作文科が生徒の心の發達にどれくらゐ役に立つて居るか。(二)初等學校と中等學校との連絡はどうなつて居るか。(三)學校教育の全体に通じて作文科のはたらきが行き届いて居るかといふ問題を論じてある。これは孰れも我々の常に注意して居る問題であるが、まだ／＼未了の問題として殘つて居る。

G 氏のいふところに依ると、(一)作文が心の發達に及ぼす作用は二方面ある。一は考へる力を作ることであり、二は思想・行爲・情緒を確に美しい言語でいひ表はす力を與へることである。ところがどうも作文では考へること感ずることを書く前に書き表す方を習はねばならぬことゝなつて居る。今日の見方からいへば決して不自然ではないが、一たい書き表はす前に考へなければなるまい、感じなければなるま